

東北大学代表团（日本国）が NSU を訪問

人文学部東洋学科と東北大学東北アジア研究センターの成果について。

2011 年 9 月 20 日～23 日、人文学部東洋学科は東北大学東北アジア研究センター(CNEAS)（日本国、仙台市）の訪問団を受け入れた。

この訪問は、2003 年に東北大学・NSU 間で締結された科学・教育分野の協力に関する協定書の一環で 2008 年に CNEAS と NSU 人文学部の間で取り交わされた協定書に基づいて行われており、過去 4 年間で定期訪問化している。ある意味でこれは学際共同ラボラトリー（2008 年にアカデミー正会員 F.A.クズネツォフ氏の発議により創設）の活動であり、同組織のロシア代表は SB RAS および NSU、日本側は東北大学である。

本年の訪問スケジュールには地球規模の自然災害問題に関するセミナーへの参加、文学理論的内容の講義、さらに毎年恒例となった東洋学科の学生によるセミナーが組み込まれた。この他、人文学部東洋学科執行部と NSU 国際交流課の発議で創設された NSU 日本センター開所式への参列、また NSU 学長 V.A.ソビャーニン教授への表敬訪問、そして SB RAS の招聘で訪れ、好意的にも NSU の学生のために国際交流プログラムに関するプレゼンテーションを行った東北大学木島総長補佐とジャンペイソフ准教授との交流も訪問スケジュールの重要なポイントとなった。

学生のために歴史学、社会学、文化人類学、民族学、東アジア経済の切実な問題に関する訪問講座を数年間にわたって毎年行ってきた東北大学訪問団が、今回初めて東洋学科長 E.E.ヴォイティシエク歴史博士の発議によって開催されたセミナーにおいて自らが参加者となったことは注目に値する。セミナーのテーマは、半年前に日本を襲い、全世界を震撼させた悲劇的出来事を思わせるものであった。大部分が英語で行われたこのセミナーにはシベリアの科学を代表する著名な学者、様々な学問分野の専門家が招待された一大変興味深い発表「津波のシミュレーションとリスク評価」を行った NSU 情報管理担当副学長 M.M.ラヴレンティエフ教授、古文書に記録されている自然界の大変動に関して聴衆に語った人文学部考古学・民族学学科長 Yu.S.フデャコフ教授、SB RAS で進められている地球規模の自然災害と天災に関する最新研究について報告した計算数学地球物理数学研究所・津波の数学的シミュレーション研究室室長 V.K.グシャコフ物理数学博士である。

10 世紀から 11 世紀の日本文学の名作を詳細に分析した佐藤勢紀子教授の講義「『源氏物語』と仏教思想」は、NSU および SB RAS の講師や研究員、同様に日本語・日本文化を学んでいるノボシビルスク高等教育機関の学生たちの興味を大いに引いた。実に画期的なこの作

品が世界中でどれほど研究されているか想像もつかない—この作品のポテンシャルは非常に高く、平安時代（9 世紀～12 世紀）貴族階級の生活百科事典さながらである。千年前に書かれた本作品の思想と主人公たちは、日本人の大衆意識と日常生活にも「源氏文化」として現在も引き継がれている。佐藤教授は物語の概要を説明し、主要人物たちの運命や鍵となる事件を通してあますところなく表現された仏教の基本思想と概念について語った。

東洋学科の重要な年間行事にあつて東北アジア研究センター副センター長岡洋樹教授を団長とする日本からの招待者たちは、SB RAS 傘下研究所の研究員やノボシビルスクの高等教育機関・組織の日本語講師たちとの顔合わせを行った。また、上級学年の学生たちが日本人教員に各自の卒業論文テーマを発表するセミナーにも参加した。日本の教員たちが人文学部で行われている日本語教授レベルの高さ、さらにこのような共催行事に教育者としてだけでなく、逐次通訳者として活躍する東洋学科講師陣（E.L.フロロヴァ上級講師、E.B.シモノヴァ上級講師、M.V.ドゥロヴァ助手）のプロ意識に毎回注目する点は特筆すべきであろう。

東北大学総長補佐木島明博教授の訪問にあわせて開催された日本センターの開所式は東洋学科と大学の重大イベントとなった。NSU 学長 V.A.ソビヤーニン教授との会談では、NSU、SB RAS および東北大学間の協力関係を発展させるうえで、この出来事が果たす役割の重要性が指摘された。会談に参加したアカデミー正会員 F.A.クズネツォフ教授は明確な発議をおこない東北大学と SB RAS が近々予定している共同プランについて語った。東洋学科学科長 E.E.ボイティシエック歴史博士は、人文科学の専門のみならず実に様々な科学・工学分野の知識にも関連してくるため、東洋学科に勤務する日本専門家の活動、東北大学との共催プログラム、さらに NSU に開設された日本センターによって、日本語や日本文化の研究者数は急増し質も向上するだろうという期待を述べた。日本訪問団のプログラムは、印象深い出来事となった 3 月の東日本大地震と津波も含め、活気ある東北大学の歴史についての報告、さらに学生交換についての国際プログラムの紹介を行った東北大学総長補佐木島明博教授と同氏の補佐役で国際教育院所属のヌルボシン・ジャンペイソフ准教授の発表で全日程を終えた。

学生の興味と希望について理解することは日本人教員たちにとって重要なことなので、来年の講義テーマの参考にするため、参加した学生たちにアンケート調査が行われた。

（テキスト：人文学部東洋学科学科長 E.E.ボイティシエック歴史博士）